

論文要旨

《目的》 外国人への妊娠期からのケアの質を向上させるため、外国人妊婦に対し助産師が実践している外来でのケアの現状を明らかにする。

《方法》 研究デザインは、質的記述的研究である。産婦人科外来で外国人のケアを提供した経験が1年以上ある助産師を関東圏内の医療機関から各1名抽出し、計4名にインタビューを実施した。施設に関する情報、参加者の属性（語学レベル、勤務年数、異文化看護教育受講経験、海外在住経験）を確認し、外国人妊婦へのケアの語りを意味ある文脈単位で抽出し、コード化してカテゴリーを抽出した。

《結果》 4名の助産師から、外来における外国人妊婦へのケアとして合計11カテゴリーが抽出された。A施設の助産師は、外国人という背景より個人を尊重し、【ルールにとらわれず個別性を尊重する】ケア、自分が不利益を与える存在ではないことを認識してもらおうと【安心できるように手を尽くす】ケアを実践し、【言語の違いを問題視しない】でケアを提供していた。B施設の助産師は、外国人妊婦は日本人と同様に妊婦であることに変わりはないと【特別視しない】ようにかかわり、伝えたいのに【伝わらないストレスを予測して配慮する】ようにしていた。また、【確実な理解を求める】ために保健指導には通訳を連れてくるよう依頼していた。しかし、外国人に対し【手間と時間がかかる人々】や【背景に対するステレオタイプの感情】を抱き、【画一的なルールへの疑問と葛藤】や【場面にあったツールがうまく使えない】といった困惑を抱えていた。C施設の助産師も【特別視しない】ようにかかわり、言葉や文化の違いから生じる不安を想定し【日本語であっても声をかけて安心をもたらす】ようにし、わかりにくい点には【時間をかける】ようにして言葉の違いを【深刻にとらえない】かかわりをしていた。また、文化や習慣の違いを考慮し【日本式の考えを押し付けない】という認識を持っていた。D施設の助産師も、【特別視しない】ようにかかわり、自分の異国での経験から【不安な気持ちを考慮する】ようにし、意識して【時間をかける】ようにしていた。文化や習慣の違いを考慮して【日本式の考えを押し付けない】という認識を持っていた。しかし【外国人担当としての苛立ち】といった困惑を抱えていた。

《結論》 外国人妊婦に対し助産師は言葉や文化の違いを配慮し丁寧にかかわり、継続ケアにつながる妊娠期のケアを実践していた。しかし、異文化看護教育の経験のない助産師は外国人への先入観やツールの活用場面での困惑が生じており、研修の機会が必要であると考えられる。外国人妊婦がセルフケアを適切に行えるような継続ケアを行うために、チーム体制で外国人妊婦にかかわっていくことの必要性が示唆された。